

物語が危険になる条件に関する質的研究

新 田 泰 生

(神奈川大学 人文学研究所)

Qualitative study on condition that a story becomes dangerous

Yasuo Nitta

The Insutitute for Humanities Reseach Kanagawa University

【要約】

本研究の目的は、河合隼雄と村上春樹の対談を分析対象とし、物語が危険になる条件を分析テーマとして、M-GTA による質的分析を行い、概念を生成することにある。

分析の結果、11 個の概念、4 個のカテゴリー、1 個のコアカテゴリーが生成された。〈葛藤の少なさ〉、〈内在的な悪の抑圧〉、〈内在的な暴力性の抑圧〉、〈バランス感覚を失なう〉等の 4 個の概念からカテゴリー《安易な認識》が生成された。〈判断を他まかせに〉、〈システムからの強制〉、〈語り手を犠牲に〉等の 3 個の概念からカテゴリー《主体性の喪失》が生成された。〈内輪だけの論理〉、〈「正義」の恐ろしさ〉等の 2 個の概念からカテゴリー《独善性》が生成された。〈直観への慢心〉、〈すぐに異次元に〉等の 2 個の概念からカテゴリー《おごり》が生成された。上記の《安易な認識》、《主体性の喪失》、《独善性》、《おごり》等の 4 個のカテゴリーからコアカテゴリー【閉じていく態勢】が生成された。物語が危険になるのは、依存的に主体性を失い、抑圧等の歪んだ認知のもと、独善的なおごり等から、現実との多層・多様で豊かな相互作用を閉じていき、「分断」に繋がっていく流れのような時などが仮説的に推測された。

キーワード：物語の危険性、M-GTA、河合隼雄、地下鉄サリン事件、過労自殺

I 問題と目的

筆者は、産業心理臨床や教育心理臨床において、クライアントが自分の物語を作り出す体験過程を援助してきた。河合（1995）は、『現代は一人一人の人間が自分の物語を見出してゆかねばならぬときだ、と私は思っている。「傷というのは物語に入る入り口なんです」と私は言ったが、実際私はそう思って、多くの傷ついた人達とお会いしている。』と述べている。

産業心理臨床では、クライアントが、何らかの傷つき体験などを通じて自身の職場組織との関わりを再検討し、組織の中でより良い自分の物語を探るプロセスを重視してきた。筆者

は、それを「組織との物語作り（新田，1994）」と名づけ、クライアントを支える物語の効力の研究と実践を行ってきた。

しかし、最近カルト教団の物語が、信者の子どもを縛るカルト2世問題が注目されている。また、陰謀論、フェイクニュースや国際紛争の背景に、物語の危険性が、指摘されるようになってきている。筆者自身も、産業心理臨床の過労死やブラック企業問題（新田，2018）に、教育心理臨床の虐待やいじめには、物語の危険性が関係していることが気になっていた。ブラック企業では、独特の経営イズムの物語やそこに巻き込まれる社員の組織との物語が影響している。以上のような関心から、物語の危険性を研究してみたいと思った。但し、研究の方法として、事例研究は、テーマに相応しい事例を集めることが困難であると同時に、その事例の守秘義務の問題もかなりデリケートになることが予想される。そこで今回は、わが国の心理臨床分野における物語研究の第一人者である河合隼雄の対談を研究の素材にすることにした。その対談相手としては、村上春樹が地下鉄サリン事件の被害者とオウム真理教信者（元信者）へのインタビューをした前後に、河合と対談している。そこで、地下鉄サリン事件とオウム真理教のことが話し合われているその対談を主な研究素材として、物語の危険性をテーマとする質的研究を行うことにした。

ここでは、以下に、物語の危険性に関係する言及を、いくつか取り上げる。

ガーゲン（1992）は、単に物語の再構成や置き換えをサイコセラピーの比喩として使いたいのではないと述べる。書きかえや語り直しは、うまく機能しない支配的な物語をより機能的な物語に書きかえることを意味し、治療の第一段階となる。しかしそれは同時に、どんな文脈でも常に適用できる物語を作り出すのが可能であるかのような幻想を抱かせることになるかも知れない。こうした硬直性こそが、人々が生活や人間関係の中での困難を生み出す要因になるとされる。

また、クライアントが自己に関する多元的で多様な物語を持つように応援すると共に、その内のどれか一つを「自己の真実」と思いこんでしまわないように配慮する。物語の構成は流動的であり続け、状況の変化や豊かな生き方をもたらす動きに対して開かれていることが大切であるという。

丸山（1995）は、J-F. リオタールの物語への考え方を以下のように紹介している。

『J-F. リオタールは「要約されつつ流通して人びとを支配する言説」を〈物語 recit〉と名づけ、とりわけ特定共時文化圏内ではばをきかす大義名分的価値観を形成し、これを守らない人びとを圧殺する〈物語〉を〈大きな物語 grand recit〉と呼んでいる。』

かつては、ナチズム、ファシズム、スターリニズム、赤狩りと言われたマッカーシズム、我が国では戦前は国内外の膨大な犠牲者を産んだ軍国主義、大政翼賛会の全体主義体制、戦後は、エコノミック・アニマルと批判された経済成長至上主義などが「大きな物語」として存在した。

我が国の産業界においては、戦前の全体主義による国家総動員法、戦後の「社畜」とさえ揶揄された職場集団主義的勤労体制も、「大きな物語」であった。今は、新自由主義、成果主義、自己責任論などが、ばをきかす大義名分的価値観を形成し、これを守らない人びとを圧殺する〈大きな物語〉になっているかも知れない。

ゴットシャル (2022) は、物語の「分断する」危険性を指摘する。『伝統的に語られてきた数々の物語は、世界を「私たち」(主人公の世界)と「彼ら」(敵役の世界)に分断する。しかも、物語は主に「私たち」を、悪者である「彼ら」との対比によって定義する。悪者は、他者である。悪者は「悪」だから、結末でたいてい彼らの身にふりかかる惨事や屈辱は自業自得だ。』

「物語が人々を善悪のカテゴリーに分断する限り、物語は共感の数だけ非情さを生む。物語は共感を生むと同時に共感と正反対のものも生み出す。悪役を押しつけられた相手の人間性に対して、道徳的に麻痺した状態を。」

また、ゴットシャル (2022) は、物語の分断への対応として、私たちが、物語の被害者に対して共感的に想像する姿勢の重要性を強調する。と同時に、極めて難しいことではあるが、物語の加害者に対しても共感的に想像する姿勢の大切さを説く。『必要なのは、悪魔への共感である。世の中で不幸な境遇にある人々—弱い者、貧しい者、鎖に繋がれた者、不当な目に遭っている者への共感—は推奨される。道徳的にそうすべき理由を理解するのはたやすい。「神の恩寵がなければ自分がああなっていたかもしれない」という不朽の倫理的な知恵にもある通りだ。

しかし歴史上の悪者と加害者に対して、私たちは共感を持って想像することができない。奴隷商人、異端審問官、アメリカ大陸征服者、虐殺者たちに対しては、神の恩寵がなければ自分がああなっていてまったくおかしくはなかったということを私たちは認めようとしないうだろう。悪魔は「他者」ではない。悪魔は私たちだ。彼は同じ環境に生まれていれば私が一あなたが一なっていたかもしれない人物なのだ。』

以上、物語の危険性に関する過去の研究を、関係性を「分断する」等、そのいくつかを取り上げた。さて、本研究の研究テーマは「物語の危険性」である。しかし、河合と村上の対談の中でも検討されているが、筆者も、もともと物語それ自身には善も悪もないと認識する。物語がおかれた条件によって、良く機能したり、危険にも機能したりすると考える。従って分析にあたって、焦点化した切り口としての分析テーマは、「物語が危険になる条件」とした。

以上から、本研究の目的は、河合隼雄と村上春樹の対談を分析対象とし、物語が危険になる条件を分析テーマとして、M-GTAによる質的分析を行い、概念を生成することにある。

II 方法

1 分析対象の資料

河合隼雄と村上春樹の対談は、過去に5回行われている。そのすべての回で、物語について話し合われているので、今回の分析は、5回の全てを分析対象の資料とした。以下に、今回実際に入手した資料の詳細について列記する。

- (1) 「現代の物語とは何か」(1994年5月に対談実施) 河合隼雄 (1995) 『こころの声を聴く 河合隼雄対話集』新潮社
- (2) 『「物語」で人間はなにを癒すのか』(1995年11月に対談実施) 河合隼雄, 村上春樹

(1996)『村上春樹，河合隼雄に会いに行く』新潮社

(3) 「無意識を掘る“からだ”と“こころ”」(1995年11月に対談実施)河合隼雄，村上春樹 (1996)『村上春樹，河合隼雄に会いに行く』新潮社

(4) 「『アンダーグラウンド』をめぐって」(1997年5月に対談を実施し，雑誌「現代」1997年7月号に掲載されたものを村上が構成しなおした)「河合隼雄氏との対話」村上春樹 (2003)『村上春樹全作品1990～2000 ⑦ 約束された場所で 村上春樹，河合隼雄に会いに行く』講談社

(5) 「『悪』を抱えて生きる」(1998年8月に対談実施)「河合隼雄氏との対話」村上春樹 (2003)『村上春樹全作品1990～2000 ⑦ 約束された場所で 村上春樹，河合隼雄に会いに行く』講談社

対談の時期に関して付言しておけば，1995年3月に，オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こっている。1995年5月に，オウム真理教の教祖の麻原彰晃が逮捕された。その後，村上は，地下鉄サリン事件被害者のインタビューを行い，その後しばらくしてからオウム真理教信者（元信者）のインタビューを行なっている。5回の対談は，1994年5月から，地下鉄サリン事件と村上のインタビューをはさんで，1998年8月の間に行われている。

2 分析期間

2022年10月～2023年6月。

3 分析方法

本研究は，物語が危険になる条件の仮説を生成し，それによって心理臨床実践と研究などに役立るという観点から質的研究法が適当であると判断した。

また，分析方法としては，研究対象がプロセス性を持っており，研究結果が現場で活用されることが期待される場合に適した研究方法である木下（2003）のM-GTAを選択した。分析にあたって，焦点化した切り口としての分析テーマは，「物語が危険になる条件」とした。

分析手順は以下のように進めた。まず，上述の計5回の対談記録の内，分析テーマに照らし，物語が危険になる条件を豊かに語り，研究者が最も着目した回の対談記録から分析を始めた。次に，その回の対談記録の中で，研究者が最初に着目した文脈の語りを検討し，その意味の解釈に沿って他の部分や他の回の対談内容について類似例を検討した。そして，該当すると思われるヴァリエーションを抽出し，定義，概念名を決めて分析ワークシートを作成した。また，分析ワークシートには，検討事項や対極例等を理論的メモとして記述した。さらに，カテゴリーを作り，コアカテゴリーを作成した。以上のように継続比較分析を行った。

Ⅲ 結果と考察

1 生成された概念，カテゴリー，コアカテゴリー

以下，〈〉は概念，《》はカテゴリー，【】はコアカテゴリーを表す。M-GTAによる分析の結果，下記のように，11個の概念，4個のカテゴリー，1個のコアカテゴリーが生成され

た。

〈葛藤の少なさ〉, 〈内在的な悪の抑圧〉, 〈内在的な暴力性の抑圧〉, 〈バランス感覚を失なう〉等の4個の概念 →カテゴリー《安易な認識》

〈判断を他まかせに〉, 〈システムからの強制〉, 〈語り手を犠牲に〉等の3個の概念 →カテゴリー《主体性の喪失》

〈内輪だけの論理〉, 〈「正義」の恐ろしさ〉等の2個の概念 →カテゴリー《独善性》

〈直観への慢心〉, 〈すぐに異次元に〉等の2個の概念 →カテゴリー《おごり》



コアカテゴリー【閉じていく態勢】

2 分析ワークシートの一例

次に、分析手続きの実際を示すために、分析ワークシートの一例を記すことにする。

概念名 葛藤の少なさ。

定義 いくつかの選択肢の間で、試行錯誤しながら検討していくプロセスが少なく、容易に特定の選択肢を選択してしまいがちなこと。

バリエーション

(1) 村上 でも彼ら（著者注、オウム真理教信者）に言わせると、そういう物欲みたいなものが人間の煩悩を膨らませて、人間を消耗させているということになりますね。だから煩悩を捨てて純化しなくてはならないんだと

河合 いや、だからね、煩悩があって消耗しないことには宗教にならないんです。煩悩を捨てたら、そんな人はもう仏様になっとるんやから。

村上 煩悩を捨てるのは修行じゃないんだ。

河合 うん。そういうのはもう仏であって、人間の修養やないですよ。でも僕らは神や仏やないからね。だから煩悩というのはもうないと思うてもまたあるちゅうようなことばかりずっと続けてやっていた。それを徹底してやったから、親鸞はあそこまでいったんです。始めからあの真似をしたって、話にならんと僕は思うんですがね。

だからこのあたりにでてくる（オウムの）人は、煩悩を抱きしめていく力がちょっと少ないんです。残念ながら。まあ違うほうから光を当てれば、我々凡人よりは純粹だとか、ものをよく考えているとかいうふうには言えます。言えるんですが、それはやっぱりものすごく危険なことなんです。この人たちがみんな仏の国に行っておられれば、それはそれでいいんだけど、この世に出ておられるかぎりにおいては、それはなかなか大変ですわ。だから人間としてこの世に生きている限り、煩悩から自由になることはやっぱりほとんどできないんじゃないかと、僕は思いますけどね。

(2) 村上 でもね、話していると、意外にみんな（著者注、オウム真理教信者）簡単に出家しちゃうんですね。話をしても、突然「それで出家しちゃいましてえ」みたいなことになるんです。「ちょっと待ってください。出家するっていうのは、家族も仕事も財産も捨てちゃうことでしょうか？それはずいぶん大変なことじゃないですか？」って聞き返すんで

すが、多くの人にとって、清水の舞台から飛び降りてというような感じのことではないんですね。

河合 考えたらね、あの世に行くのにもものを持っていく人間なんていないですね。みんな捨てていくわけでしょう。だから出家というのは死ぬのと同じです。あの世に行くみたいなものです。だから楽といえば楽だと言えるし、全部すっきりしてると言えるんだけど、そうは言ってもやはり、我々はみんなこの世に生きているんだから、ものを捨てるのと同時に、この世に生きている苦しみを引き受けて、両方同時に持っていないといけない。そうしてない人はほんとは信用できないんじゃないかと僕は思います。葛藤というものがなくなってしまふわけでしょう。

(3) 村上 「箱（著者注、これ以前の部分で、村上は、オウムの人達が、単一で平板な小さな箱に入っているように見えると表現している）に入る」というのは、カルトの場合でいえば「絶対帰依」ということになりますね。

河合 そうです。絶対帰依です。これは楽といえば楽でいいです。この人たちを見てみると、世界に対して「これはなんか変だ」と疑問を持っているわけです、みんな。で、その「何か変だ」というのは、箱の中に入ると、「これはカルマだ」ということで全部きれいに説明がついてしまうわけです。

村上 全部きれいに説明がつくというのが、この人たちにとっては大事なんですね。

河合 そうです。でもね、全部説明がつく論理なんてものは絶対ダメなんです。僕らにいわせたらそうなります。（後略）

(4) 河合 だからね、それ（著者注、オウム真理教団）自体はいい入れ物なんです。でもやはり、いい入れ物のままでは終わらないんです。あれだけ純粋な、極端な形をとった集団になりますと、問題は必ず起きてきます。あれだけ純粋なものが内側にしっかり集まっていると、外側に殺してもいいようなものすごい悪い奴がいないと、うまくバランスが取れません。そうなると、外にうって出ないことには、中でものすごい喧嘩が起こって、内側から組織が崩壊するかもしれない。

村上 なるほど、ナチズムが戦争を起こさないわけにはいかなかったのと同じ原理ですね。膨らめば膨らむほど、中の集約点みたいところで圧力が強くなって、それを外に向けて吐き出さないと、それ自体が爆発してしまう。

河合 そうです。どうしても外を攻撃することになってしまいます。ずっと麻原が言っていたでしょう、我々は攻撃されているって。それは常に外側に悪を置いておかないと、もたないからです。

村上 アメリカやらフリーメーソンやらの陰謀話がでてくるのもそのためですね。

(5) 村上 でもオウムの場合、そこ（著者注、オウム真理教団）に入るにあたっては、ちゃんとその「善き動機」というのがあるわけですね。そして善き目的というものもある。

河合 おまけにこの世の利益をすべてなげうって入ってきます。

村上 あの、ちょっと思ったんだけど、すべてをなげうつってけっこう気持ちいいんじゃないんでしょうかね？

河合 それは人によりますね。なんぼ「なげうとう」と思ってもなげうてん人もいます。そ

れからなげうったような顔をして、ちょっと横に置いといたりする人もいて。僕なんかもそうですが（笑）。

理論的メチ

(1) バリエーション1について

村上は、煩惱が消耗させるので煩惱を捨てて純化しなくてはならないとオウム信者側の視点を語る。一方、河合は、「煩惱があって消耗しないことには宗教にならない」と語り、「煩惱を捨てたら、そんな人はもう仏様になっとるんやから」とやや諧謔を込めつつも、ストレートに語っている。人間である僕らは、煩惱はもうないと思ってもみても、またあるという葛藤の繰り返しをずっと続けてやってきた。それを徹底してやったから親鸞はあの境地までいった。それを始めから煩惱を捨てる真似をしてみても、お話にならないと河合は語る。

(2) バリエーション2について

河合は、出家するとは、物を捨てて楽になることと共に、一方でこの世に生きている苦しみを引き受けること、この両方をやるのが大事であるという。この葛藤を抱え続けるからこそ、その人を本当に信用できる。インタビューでのオウム真理教信者の人々は、出家して、物を捨てる楽さが中心になっている。河合が言うところの、生きている苦しみを引き受けることからくる葛藤が少ないように思われるのである。

(3) バリエーション3について

信者は、もともと世界に対して「これはなんか変だ」と疑問を持っていたはずなのに、カルトに入ると、グルや教義によって、全部きれいに説明がついてそれが片づいてしまう。説明される内容に対して疑問を持ち葛藤しつつ、より丁寧に観察と検討を続けていけば良いのだが。操作された「神秘体験」や洗脳のテクノロジーにより、疑問と検討が継続するはずの葛藤がほとんどなくなってしまうのである。

(4) バリエーション4について

おそらく純粋なだけならば、おだやかな集団、ゆるやかな集団など、様々にあるだろうと思われる。しかし、純粋なうえに、「極端な形」をとると、問題が生じるという。オウムの場合は、教祖の無理な命令にも身を投げ出して実践できるかという修行の「純粋さ」が求められた。しかも、相互に教祖への忠誠を暗に「競い合う」ような力動は、組織内部に強い圧を生み、内部で葛藤を抱えておくことができずに、外部に敵を作り出さなければいけないようになってしまう。

(5) バリエーション5について

ここでも、この世の利益をすべてなげうって教団に入ってくることで、この世の葛藤を投げ出そうとする姿が語られている。それに対して河合は、どうしても葛藤を捨てきれない人や、なげうったようなポーズを取りながらも捨てられないものを横に置いておく人について言及している。しかも後者の建前と本音の葛藤そして「開き直り」とも取れそうな人の一人が、河合自身だとユーモアを込めて笑う。

(6) 対極例は、葛藤が多すぎる条件下で、物語が危険になる場合と考えられる。理論的には、あると思われるが、今回のデータでは見つからなかった。

3 概念、カテゴリー、コアカテゴリーの結果と考察

概念は紙数の関係上バリエーションは一例に止め、名称、定義、バリエーション、考察を記す。カテゴリー、コアカテゴリーは名称、定義、考察を記す。概念〈葛藤の少なさ〉は、上記の例示で全容を記したので、その次の概念から列記する。

(1) 概念名 内在的な悪の抑圧

定義 自己や組織に内在する悪に気づかないようにしていること。

バリエーションの例

村上 球形みたいな集合体で、外側はソフトだけれど、さっきも言ったように中心点には熱が集中してしまっている。でも外側はそれには気がつかない。ほとんどの信者はこう言うんです、「我々はごきぶり一匹殺さないような生活をしているんです。それなのにどうして人間が殺せますか」って。

河合 チャップリンの『殺人狂時代』ですよ。あの人殺しばかりしているやつは、毛虫がいたらぱっと拾ってね、花のところを持って行ってやります。虫ひとつ殺さないで、人ばかり殺しているんです。やっぱり人間というのはほんとにしょうもない生物やからね。だから自分の悪というものを自分の責任においてどんだけ生きているかという自覚が必要なんです。

村上 でもチベット密教でも、オウムとだいたい同じような修行をしているわけですよ。出家して瞑想修行をしています。いったいどこが違っているんだろう？

河合 僕はチベット仏教については、あまり詳しいことはわかりません。でもそういう悪の問題みたいなのは必ず上手に盛り込んでいると思いますよ。それを翻訳して持ち込むときに、ものすごくわかりやすく単純にしたんじゃないでしょうか。このへんが一番むずかしいところでね、悪をどの程度生きるか、行使するかというのは、本の中にはいちばん書きにくいことなんです。

村上 実地の部分で経験的に伝えていくしかない。ところが解釈になると、どうしても整合的にならざるを得ないわけですね。

河合 人間が頭でものを考えて、整合的で良いことを書きだしたら、悪が入り込めないんです。(後略)

考察

まず河合が、「人間というのはほんとにしょうもない生物」という認識を持っていることに注目したい。その上で、自分の悪というものを自分の責任においてどれだけ生きているかという自覚が必要と言う。人や組織の中に普通にある「悪」を見ないようにしているという条件の時に、物語が危険になってくる。この後、その都度記述しないが、以下の各概念、カテゴリー、コアカテゴリーの条件下で、物語が危険になっていくということになる。

(2) 概念名 内在的な暴力性の抑圧

定義 自己や組織に内在する破壊的な衝動性に気づかないようにしていること。

バリエーションの例

河合 (前略)日本人は、自分の内にあるこの暴力を意識化し、それを適切に表現する方法を見出すことに努めないと、突発的に生じる抑制のきかない暴力による加害者になる危険が高いことを自覚すべきだと思います。オウムの事件もそのように見ることができます。(中

略)

オウムにしろ、(中略)もともとの動機としては、「暴力」どころか、「正しい」ことや「よいこと」をしようという意図がはたらいています。しかし、そこに危険極まりない暴力が関与してくる。これを避けるためには、自分の中の暴力性を最初から考慮の中に入れて、行動することが必要なのだと思います。

考察

河合は、特に日本の場合、「あの戦争ということがあったから、ものすごく急進的な暴力否定」になり、平和が大切だからと、子どもに兵隊ごっこやチャンバラとかまで全部禁止したりしたと語る。例えば、いじめで相手を殺すまでやってしまう原因の一つは、子供の頃から、自分が持っている暴力性を経験することがなすぎることであると指摘する。また、逆に戦前には、日本は暴力性で「めちゃくちゃやっていた」時期がある。日本の文化、日本の現代は、そのような「暴力性」を潜在的に背負っていることをみんなもっと自覚すべきであると述べる。

村上は、戦後の日本の問題点は、戦争の圧倒的な暴力を相対化できなかったことだと指摘する。みんなが被害者ようになり、「このあやまちはまだ二度とくり返しません」というあいまいな言葉に置き換えられて、だれもその暴力装置に対する内的な責任を取らなかったのではないかと述べる。

(3) 概念名 バランス感覚を失なう

定義 ほど良い程度を保つ姿勢を見失うこと。

バリエーション例

村上 これについては正直に話してくれる人もいたし、話してくれない人もいたけれど、オウムに入った人の話を聞くと、やはり育った家庭の環境に問題があったという人はけっこう多かったですね。両親からの正常な愛情が幼い人格形成期に乱れていたとか、足りないとか。そういうケースが多かったような気がします。

河合 ここは非常にむずかしいところですが、しかし一般論的にいえば、それはたしかに言えると思います。それはどういうことかといいますとね、この人たちは頭ですごく考えとるでしょう。こんなふうにごっと小さい箱に入ってものをぐんぐん考えようとするときに、それをくい止めるのはやはり人間関係なんです。やっぱり父親とか母親です。感情です。それが動いていると、こんな小さな箱にはなかなか入れないんです。なんやらおかしいやないかと、そういう気持ちが働くんですよ。

村上 バランス感覚が働くということですね。

河合 そうです。バランス感覚です。そのようなく動く装置がね、(両親の愛情が受けられないと)いちばん発達しにくいんです。

だからね、この人たちが言うてるようなのと似たことは、若い人たちはみんな多かれ少なかれ考えてると思うんです。なんのために生きているかとか、こんなことしても仕方ないんじゃないかとか、いろいろ真剣に考えてはいるんだけど、そこには今言ったような自然な感情が流れたり、全体的なバランスの感覚が働いたりして、その中で自分をつくっていくわけです。ところがオウムの人たちはそこのところが切れてしまっているから、ずっとその

ままあっちへいってしまうんです。だから気の毒といえば、本当に気の毒なんです。

考察

河合が言うように、頭だけで突き詰めてしまうのを防ぐのは、親しい人間関係での率直な感情表現だろう。確かに両親や兄弟の「うまく言えないけど、何か変だと思うよ」などの発言が、頭で思いつめた考えに、バランス感覚を回復するきっかけを与えることも、あるかもしれない。

(4) 以上、〈葛藤の少なさ〉、〈内在的な悪の抑圧〉、〈内在的な暴力性の抑圧〉、〈バランス感覚を失なう〉の4個の概念をまとめたカテゴリーを次に示す。

カテゴリー名 安易な認識

定義 自己や組織に内在する悪や暴力性を抑圧し、多様な選択肢の間で試行錯誤していくプロセスが少なく、バランス感覚を失ない、多層的な深みがない平板認識のこと。

考察

自己や組織に内在していて当然である悪や暴力性に気づかないことが、盲点になっている。内在する悪や暴力性を認識していればこそ、現実の理不尽さや不可解さ、それゆえの多種多様な複雑さを実感するようになる。しかし、悪や暴力性を抑圧しているために、現実認識が、単純、平板で、多層的に見るような深みがない。従って、多様な選択肢の間で、試行錯誤しながら検討・吟味していくプロセスがなく、ほど良い程度を保つ姿勢の必要を感じることもなく、平易に特定の選択肢を選択してしまうことになる。

(5) 概念名 判断を他まかせに

定義 指導者や理論に依存して自分で判断したり、責任を持つことをしないこと。

バリエーション例

村上 僕はなるべく暇をみつけて裁判の傍聴をするように心がけているんですが、でも実行犯になった人々を見ていると、彼らの犯した罪は罪として、やっぱりなんか哀れだと思えないわけにはいかないんです。自分で選んだ道とはいえ、やはり多かれ少なかれ精神的にコントロールされてしまっていたわけですから。だから法的に与えられる量刑の問題についてはともかく、人間としての責任をどの時点まで追求できるものか、僕は決めかねています。あれだけ多くの被害者の皆さんにお目にかかって、この犯罪に対して僕なりに激しい怒りを感じてはいるんですが、それでもなお哀れさというのはしっかりと残ります。

河合 それは日本のたくさんのBC級戦犯の人たちについても言えることですね。

村上 結局システムの問題ということになるのかもしれない。でもああいう、命令を狭義に集約的に与えてそれを実行させるシステムというのは、大きくも小さくも自然にできちゃうんですね。それは僕にとってはすごく怖いことです。どうしてそんなノウハウがそこにぽっと出てきて、比較的短い期間に、あがらえないくらいがちがちに固められてしまうのか、それは謎です。そういうものの存在を好む力が自然に、あるいは自縛的に働いているとしか思えないところがあります。本当に戦犯の問題と似ていますよね。どのように裁いても、必ず問題は残るでしょうね。

考察

オウム真理教事件で言えば、信者が、どうして自分の判断を、麻原彰晃や教義に委ねてし

まったのだろうか。河合は、素朴な物語に、現代のテクノロジーというまったく異質なものを組み込んで物語を作ろうとした点だと言う。LSD等の薬物を利用して「神秘体験」を作り出すというテクノロジーに魅了され、信じ込むという判断放棄をしてしまっているようである。後半の村上のいうシステムの恐ろしさは、次の概念〈システムからの強制〉のバリエーションとしても分類されるものであるが、筆者も重要な問題と捉えており、総合考察の過労自殺事例でもさらに検討したい。

(6) 概念名 システムからの強制

定義 集団や組織の意図に服従させようとする強い圧力が働くこと。

バリエーション例

村上 ひとつは会社というのはこっち側のシステムであり、そこには一種宗教的な色彩さえある。こういう言い方をすると問題があるかもしれないけれど、そこにはある意味ではオウム真理教のシステムと通底している部分があるかもしれない。実際に被害者（著者注、地下鉄サリン事件で村上からインタビューされた被害者の人々）のサラリーマンの中には、自分だって同じ立場だったら命令を実行していたかもしれないと告白した人も何人かいました。

考察

村上は、オウム真理教のシステムと会社のシステムで通底している部分があるかもしれないという。筆者は、これを重要な指摘として受けとめた。筆者の産業心理臨床における経験から見ても、ブラック企業や過労死問題は、まさに会社とオウム真理教がシステムとして通底している部分を有していると思わせる。独特の経営哲学を持つ創業者をまるで「教祖」のように崇拝するかのように仕向け、その経営イズムを実現するために過労死ラインまでの長時間労働をせざるを得ないようにする労務管理システムは、ありえるかもしれない。この点は、研究テーマの重要なポイントなので、後ほど総合考察で再度検討することにしたい。

(7) 概念名 語り手を犠牲に

定義 物語がその物語の語り手を超えてしまい、物語のパワーが語り手を犠牲にしてしまうこと。

バリエーション例

河合 だから麻原も終わりの頃には、もうやめてしまいたいと思っていたのではないのでしょうか。でもやめたいと思ってもやめられないです。ヒットラーなんかもそうだったと思いますね。止めようがなくなるんです。自分が作った物語の犠牲に自分になってしまう。麻原についてはまったくそのとおりだったと思いますね。

考察

物語がネガティブな力をもつ場合があり、そのネガティブ・パワーが、現実的な部分で、一定の水準以上に語り手を超えてしまうと、破壊的なパワーを語り手にもたらす。河合は、これを物語の怖さと言っている。

(8) 以上、〈判断を他まかせに〉、〈システムからの強制〉、〈語り手を犠牲に〉の3個の概念をまとめたカテゴリーを次に示す。

カテゴリー名 主体性の喪失

定義 集団や組織の意図に服従させようとする強い圧力が働き、指導者や理論に依存して自

分で判断し責任を持つことをしない、あるいは物語の犠牲になってしまうこと。

考察

集団や組織の意図に服従させようとする強い圧力が働く。また、それに従わない時には制裁を加えられることへの「恐怖」が伴うこともある。指導者や理論に依存して自分で判断することを放棄したり、責任を持つことをしない。あるいは、物語のネガティブ・パワーがその物語の語り手を超えてしまい、最後には物語のネガティブ・パワーが語り手を犠牲にしてしまうことなどが起こる。

(9) 概念名 内輪だけの論理

定義 その集団内では理解されやすいがその集団外には理解されにくい考え。

バリエーション例

村上 たとえばA（著者注、念のため匿名にしたが、オウム真理教の当時の外報部長）という人がいますよね。この人は非常に巧妙なレトリックを駆使して論陣を張るわけだけけれど、彼が言っているのはひとつの限定された箱の中だけで通用する言葉であり理屈なんです。その先にまではまったく行かない。だから当然ながら人の心には届かない。でもそのぶん単純で、強固で、完結してるんです。彼もそのへんのことはおそらくわかっていて、それを逆手にとってうまく利用しているんじゃないでしょうか。相手は彼を言い負かすことができない。言っていることに深みがない、なんか変だとわかっているけど、有効に反論できないんです。だからみんないらいらする。でもオウムの人たちに聞くと、Aさんみたいに頭の良い人はいないって言います。手放して尊敬している。彼らにそれのどこが変かというのを説明するのはすごくむずかしいです。その箱の限定性を証明しなくてはならないわけですから。

考察

村上は、他のバリエーション部分で、『オウムの人たちは口では「別の世界」を希求しているにもかかわらず、彼らにとっての実際の世界の成立の仕方は、奇妙に単一で平板なんです。あるところで広がりやが止まってしまっている。箱ひとつ分だけ世界を見ていないところ』があると語っている。この語りを受けて、村上は、例示の「ひとつの限定された箱の中だけで通用する言葉であり理屈」と語っているのである。

(10) 概念名 「正義」の恐ろしさ

定義 正義を実行するためならば何をしていても良いというような行動をすること。

バリエーション例

村上 オウムの人に会っていて思ったんですが、「けっこういいやつだな」という人が多いですね。はっきり言っちゃうと、被害者のほうが強い個性のある人は多かったです。良くも悪くも「ああ、これが社会だ」と思いました。それに比べると、オウムの人はおしなべて「感じがいい」としか言いようがなかったです。

河合 それはやっぱりね、世間を騒がすのはだいたい「いいやつ」なんです。悪いやつで、そんなに大したことはできないですよ。悪いやつで人殺ししたやついうたら、そんなに多くないはずですよ。だいたい善意の人というのが無茶苦茶人を殺したりするんです。よく言われることですが、悪意に基づく殺人で殺される人は数がしれてますが、正義のための殺人

ちゅうのはなんといっても大量ですよ。だから良いことをやろうというのは、ものすごいむずかしいことです。それでこのオウムの人たちというのは、やっぱりどうしても、「良いこと」にとりつかれた人ですからねえ。

考察

河合は、善が悪を駆逐するとなると、善は何をしてもかまわないとなって、それが一番怖いことという。ついつい悪いことをしたというのとは違うものになると。正義を唱えた戦争などがその例である。

(11) 以上、〈内輪だけの論理〉、〈「正義」の恐ろしさ〉の2個の概念をまとめたのカテゴリーを次に示す。

カテゴリー名 独善性

定義 その集団内では理解されるがその集団外には理解されにくい考え方で、例えば正義を実行するためなら何をしても良いとの行動をするような自分勝手さのこと。

考察

自分達の偏見や狂信等による認知の偏りが大きく、他者の言動やマスコミの情報等の環境との多層・多様な相互作用により変化していく可能性が低い、閉じた構造になりがちである。例えば、自分達に都合の良い言動を、価値観の異なる相手側に、一方的に押しつけること等が挙げられる。

(12) 概念名 直観への慢心

定義 さまざまな洞察力に過剰な自信を持ってしまうこと。

バリエーション例

河合 そうです。というか、見通せたように思ってしまうんです。そしてそれが面白いようにびたりびたりと当たることがあります。こうなるやろ、ほらこうなった、というふうには。しかしそれをやり出すともう絶対に駄目ですよ。やはりいつか外れることがあるわけですから。それは人間ですからね。それから麻原彰晃じゃないけれど、「僕がなんとかしてやろう」と思いだしたりもします。そうなったらおしまいです。

考察

河合は、麻原彰晃も、最初の頃は純粋でカリスマ性を持っていた人であっただろうという。ただし、ある種の組織の頂点に立つと墮落が始まる。この人はすべてを分かっているとのみんなの期待に応えなければと、「神秘体験」や洗脳のテクノロジーなどのテクニックを使い、ごまかしを始めてしまうことになる。

(13) 概念名 すぐに異次元に

定義 世間的なつながりが弱いため、ある種の覚醒から一気に異次元に行ってしまいやすいこと。

バリエーション例

河合 (前略) 僕らなんか瞑想したって、なかなか覚醒なんかしないですよ (笑)。

村上 僕もそうですね。

河合 そうですよ。瞑想なんかしてると、いつ終わるんかいなとか、うまい飯を食いたいなあとか (笑)。つまりね、それがもっと普通の人になると、儲けることとか税金とかで頭

が一杯で、もう宗教なんかいらんということになってしまうわけですよ。そっちがものすごく大きくなるから。で、「霊的」なことなんかぜんぜん関係なしに生きているということになる。まあそこまではいかないにせよ、我々がちょっとくらい瞑想の真似したって、僕らにも煩惱があるからなかなかうまくいかないんだけど、その「煩惱をもってなおかつ」というのが大きな意味を持つんです。ところがこの（オウムに行った）人たちは煩惱の世界が弱すぎるんです。

村上 だからすぐに悟っちゃう。あまりにもすぐに悟っちゃう。

河合 面白いことに、あまりにも早く悟った人というのは、その悟りを他人のために役立てることができない場合が多いです。それに比べると、苦勞して時間をかけて、「どうしてこんなに悟れんのやろう。どうして自分だけあかんのやろう」と悩みながら悟った人のほうが、他人の役に立つ場合が多いのです。煩惱世界を相当持っていて、なおかつ悟るからこそ意味があるんです。

考察

前半は、概念「葛藤が少ない」にも繋がりを内容であるが、後半の煩惱が少ないゆえに、あまりにもすぐに悟っちゃうという部分が、この概念の要となる記述である。ちなみに、内観法を創始した吉本伊信は、周りと比べてなかなか悟れない自分に長く苦しんだがゆえに、その後の内観法の指導に熟達したと言われているエピソードを思い出させる話である。(14) 以上、〈直観への慢心〉、〈すぐに異次元に〉の2個の概念をまとめたの 카테고리を次に示す。

カテゴリー名 おごり

定義 さまざまな洞察力に過剰な自信を持ったり、一気に異次元に行ってしまうような万能感があること。

考察

対談の中で河合は、セラピストも、一時的に、先を見通す洞察力に過剰な自信を持ちすぎてしまう時期があることを語り、そこを抜けていく大切さに触れている。また、強大な力を持った創業者や組織の物語が、この種の万能感におぼれて、危険になっていくことも多い。総合考察の過労自殺の事例でもさらに検討したい。

(15) 以上の、《安易な認識》、《主体性の喪失》、《独善性》、《おごり》等の4個のカテゴリーをまとめて、以下にそのコアカテゴリーを示す。

コアカテゴリー名 閉じていく態勢

定義 依存的に主体性を失い、抑圧等の歪んだ認知のもと、独善的なおごり等から、環境との多層・多様で豊かな相互作用を閉じていき、分断に繋がっていくような流れのこと。

考察

物語がさまざまな事象間を繋いでいくといわれるのに対して、【閉じていく態勢】は、逆にさまざまな事象間の相互作用を減少させ、分断に繋げ、閉じていく。自己や組織に内在する悪や暴力性の抑圧、自己愛的な《独善性》や《おごり》などさまざまな歪んだ認知のもとに、環境との多層・多様で豊かな関わりを減少させ、現実認知の歪曲に繋がる。ともすれば、異質性、他者性を、分断し、排除しがちである。そのような事象との相互作用を欠いて

いるために、その事象に対して閉じられていく。そのような流れと合う事象とのみ相互作用し、それ以外の事象を分断・排除し、対話や交流による変化が少ない流れである。

IV 総合考察

1 「悪」について

総合考察として、本研究結果や二人の対談において中心的なテーマである「悪」について検討してみたい。「悪」とは何であろうか、これが難しい問題であるということは、二人の対談の中でも述べられている。殺人などの法律に反する行動を悪と言うのは容易ではある。しかし、触法しない、それ以前にある、怒り、憎悪、嫉妬、復讐、殺意などを、どのように考えるのかは難しい。例えば、日常的に生じている、個人間の「パワー」維持・獲得のための他者否定的な言動や、フェイク・扇動・いじめなどの対人操作、組織の権力維持・獲得のための抑圧、排斥、対立、抗争などはどうだろうか。攻撃衝動や性衝動は、基本的には生物学的な現象であり、善悪の判断とは別のものであると言えよう。しかし、それによる行動は、その条件と文脈によっては、善とも悪とも判断されることになる。

深谷（2020）は、河合隼雄と遠藤周作の対談を対象に研究して、河合隼雄の「悪」論の特徴として、以下の4点を挙げた。①「悪」には「創造」と「破壊」の二つの側面がある。②「悪といかに向き合うか」という問いが重視される。③「悪」と向き合う上では「一定の線」への自覚が必要である。④「悪」との向き合い方には、「悪」との「微妙な共存」があり得る。

対談の中で、今後もオウム真理教と似たようなカルトは生まれてくるだろうという村上の危惧に対して、河合は、実害を与えない限りは、出てきてもしようがない、ただ実害の判断がとても難しいと答えている。

筆者も、クライアントに対すると共に、自分自身に対しても向き合おうとする心理臨床家として、創造への契機ともなりうる「悪」への柔軟な姿勢を大切にしたいと思う。しかし、自と他において、「悪」をどの程度許容し、どのように表現するのかは難しい。しかも、その際に、つき合おうとする「悪」が、実害になってしまわない「一定の線」を、予め決めることは困難である。実際には、その都度、そこで吟味していかざるを得ないと考えている。さらに言えば、心理臨床家のスタンスとしては、殺人などの法律違反をした明らかに「悪」とみなされる人々に対しても、相手の立場、気持ちに立って、共感的理解に努めようとしなければならない。職業倫理からくるそのような中立的なスタンスが、「悪」への共感的な理解を、少しでも深める可能性を持っているかもしれない。

物語は、ある条件下では、ある人々を「悪」と断定し、彼らと私たちを「分断」させ、両者を悲惨な闘争に巻き込んでしまう。その条件下では、時に物語は何度も同じように繰り返され、何度も残酷な事態を生み出す恐ろしさがある。これに対応するには、筆者の私見では、心理学だけでは当然限界があり、法学、医学、社会学、政治学、経済学等の総合的な視野と対策が必要と思われる。それを踏まえたうえであれば、今回のような物語が危険になる条件を明らかにする心理学的な研究が、その予防の一端として意味がでてくるとと思われる。

以下の考察も、これらの点に留意しながら続けていきたい。

2 地下鉄サリン事件のサリン散布実行犯たちへのバッシングについて

さて、総合考察の次として、前述の概念、カテゴリー、コアカテゴリーの結果と考察に基づき、二つの事項について、考察してみたい。一つ目は、地下鉄サリン事件のサリン散布実行犯たちへのバッシング現象であり、二つ目は、企業組織風土の物語による過労自殺事例である。ちなみに、過労自殺の問題は、この論文を執筆中の2023年6月に、東京五輪・パラリンピックを巡る談合事件を受け、電通グループは外部有識者による調査検証委員会の報告書を提示した。もともと本論文では、産業心理臨床分野の象徴的な過労自殺である電通の過労自殺事例を取り上げる予定であった。そこに、電通の組織風土の「おごり」を指摘したこの報告書が加わることで、筆者の検討により妥当性が加わったと言えるかもしれない。

この考察の狙いは、物語の危険性が現れていると思えるバッシング現象や過労自殺事例において、本研究結果の概念、カテゴリー、コアカテゴリーが、「条件として」どの程度認められるかを推測することにある。本来の研究枠組みなら、これは、仮説としての概念群が実際の事例検討で、どの程度の妥当性を持ちうるかを臨床的に確認する、つまり研究Ⅱとして、別枠で記述すべきものと思われる。しかし、今回は、紙数の関係からも、その予備的な検討として記述しておくことにしたい。

辺見(2006)は、地下鉄サリン事件現場やその後のオウム真理教事件裁判の傍聴の経験を、事件後十年目に、回顧し記している。それは事件の当時よく言われたとされるサリン散布実行犯たちを「鬼畜」とたとえ、一方私たち市民を対比的に「良民」とするような単純な構図に対して、鋭く批判的な論述を加えている。

辺見に触発されて、今回の研究結果に繋げて、少し述べてみたい。サリン散布実行犯たちを「鬼畜」とし市民を「良民」とする物語は、単純に悪と善に二分して、しかも両者を「分断」してしまう危険性を持ちかねない。そこには、良民は、概念〈葛藤の少なさ〉(以後、初出時のみは概念、カテゴリー、コアカテゴリーと記載する)、自らを正義とみなして、サリン散布実行犯たちを糾弾して当然という〈正義の恐ろしさ〉の条件がありそうである。良民は、〈内在的な暴力性の抑圧〉の条件下で、激しく攻撃的に物語を言い募っているかもしれない。また、マスコミの「鬼畜」対「良民」という煽情的な物語に煽られて、〈判断を他まかせに〉し、さらに、世間のオウム真理教批判という〈システムの強制〉にも圧迫され、〈バランス感覚を失い〉、良民は、オウム・バッシングという思わぬ言動に走らされるかもしれない。このような条件下では、この物語は、両者を「分断」し、彼らを悪として排除することだけに終わってしまう。このように見ると、現代でも、物語の善と悪の対比の危うさは、インターネットから戦争までのさまざまなスケールで、幾度となく繰り返され、闘争と排除される人々を生み出している。

3 過労自殺事例について

以上のように、サリン散布実行犯たちを、私たちとは別のものと見る視点に対して、〈システムからの強制〉のバリエーションで示したように、村上は、もう一つの視点を示してい

る。会社などにも、ある意味ではオウム真理教のシステムと通底している部分があるかもしれない。実際、被害者のサラリーマンの中には、自分だって同じ立場だったら命令を実行していたかもしれないと告白した人も何人かいたという。

〈システムからの強制〉の考察でも触れたように、オウムのシステムを、私たち「良民」とは異なる「鬼畜」のものとして「分断」してしまわずに、両者に通底するものを探索していく。それが、物語が危険になる条件の研究を深めて、同時に人々を悲惨な状況に追い込むことを予防する糸口の研究になり得ると考える。

そこで次に、経営者による過剰な社訓と組織風土の「物語」が、長時間労働、パワハラ問題、過労死、新入社員の過労自殺、談合事件などのさまざまな問題を生じさせてきた電通グループの場合を検討する。

東京五輪・パラリンピックを巡る談合事件を受け、電通グループは外部有識者による調査検証委員会の報告書を提示した。読売新聞（2023）によれば、『調査委は、電通が独占禁止法違反で起訴された背景には、成果を優先する組織風土や法令遵守の意識を欠いた経営陣の姿勢、「五輪は電通」というおごりがあったと批判した。（中略）電通は、新入社員の女性が過労自殺した違法残業事件などでも社会から批判を浴びてきたが、調査委では「これまでの問題を局所的なものにとらえ、法令順守の意識を高めることができなかった」とし、今回の事件の要因にもなったと非難した。さらに、「（社内には）『五輪は電通にしかできない』などという意識や表現が見られた」と言及。こうした「おごり」が、自分たちの行動を批判的に検討する姿勢を弱めた』とある。この短い新聞記事の中だけでも、早くもカテゴリー《おごり》や、違法行為という概念〈内在的な悪の抑圧〉を推測できそうである。

電通の組織風土の問題は、4代目社長が作成した「電通：鬼十則」が有名である。かつては社員手帳に記載されていた十則からなる行動規範、いわば会社が社員に求める働き方の「物語」なのである。特に、第5則の「取り組んだら放すな、殺されても放すな、目的完遂までは、、、。」は、電通での成果至上主義の勤労体質の問題をあらわしていると言われている。この〈システムからの強制〉のメカニズムは、多くの過重労働問題とパワハラ問題を生み出してきた。過労死自殺だけを挙げて、昔から若い社員の自殺が既に2件あり、その時々で社会問題として大きく報道され、その都度電通の改善が求められてきた歴史がある。

熊沢（2018）に基づいて、1991年8月の電通入社2年目の男性社員の過労自殺について述べる。1990年4月入社後しばらくは、慢性的な残業に悩みながらも、時代の先端をいく電通で、自分の企画案が成功した時の喜びなどもあり、意欲的な勤労態度を保っていた。しかし、入社半年後の1990年11月頃から、翌日の午前4、5時の帰宅どころか徹夜勤務で帰宅しない日もしだいに増え、帰宅しても2時間後には出勤するといった日々が続いた。両親は健康を心配して、彼に有休をとるように勧めている。しかし彼は、有休をとると「代わりの者がいない」「かえって後で自分が苦しむ」、上司に休暇を願い出ると「仕事は大丈夫か」と言われて取りにくい〈システムからの強制〉、と応じなかった。この年度に彼が実際に取った有休は、0.5日に過ぎなかった。1991年3月頃、部長は直属の上司である班長に、彼が社内をよく徹夜していることを指摘している。それを受けて班長は彼に、納期や業務量の変更にはふれぬまま、「帰宅してきちんと睡眠をとり、それで業務が終わらなければ翌朝早

く出勤して行うように」と「指導」したという〈内輪だけの論理〉〈葛藤の少なさ〉《安易な認識》。的外れで形だけの「指導」である。この班長は、その一方、月に一度の班の飲み会で、靴にビールを注いで彼に飲ませ、靴底で殴打したりもしている〈内在的な暴力性の抑圧〉〈システムからの強制〉。そんなこともさしてめずらしくないのが、時代の先端をいく電通の当時の職場風土の雰囲気であった〈内在的な悪の抑圧〉〈内在的な暴力性の抑圧〉。1991年7月以降、班から独立して業務を遂行することになり、新たに別の部署の営業を担当または補助する責務が加えられ、いっそうの過重労働を強いられたのである〈内輪だけの論理〉〈葛藤の少なさ〉〈システムからの強制〉《安易な認識》《おごり》。1991年夏、彼は、もう疲労困憊して、同僚の見るところ職場でも元気がなく、顔色は悪く、暗い感じで鬱々とし、眼の焦点も定まらない状態に陥っていった〈バランス感覚を失う〉《主体性の喪失》。入社2年目の8月27日、彼は、会社に欠勤を伝えた後、自宅の浴室で縊死したのである。

その後、彼の父親は、真相究明の活動を始めた。しかし、電通は、社内はもとよりクライアント境界にまでいち早く箝口令を敷き、社内にも組合にも真相究明の協力者は得られなかった〈内在的な悪の抑圧〉。父親による電通社長への直訴状も、和解への打診も、会社側に無視される〈内在的な悪の抑圧〉《おごり》。1993年、父親は、彼の死に対する企業責任を問う民事訴訟、損害賠償請求訴訟を提起する。裁判において電通は、①彼の仕事量は過度の残業を必要とするほどではない〈内輪だけの論理〉〈内在的な悪の抑圧〉《安易な認識》、②かりに「退館者記録」が長時間の在館時間を示しているとしてもそのすべてが残業とはいえず、本人の申告残業時間のみが残業時間である〈内輪だけの論理〉〈内在的な悪の抑圧〉、③仕事がないのに在館時間が長いのは、家庭（父母）が冷たく帰りたくなかったため、またうまくいっていなかった恋人との電話のためであるなどと主張した〈内輪だけの論理〉《独善性》《おごり》。彼の自死は業務上のものではなく、まして会社に安全配慮義務違反はないというのである〈内輪だけの論理〉〈内在的な悪の抑圧〉〈内在的な暴力性の抑圧〉《安易な認識》《独善性》《おごり》。電通の主張は一部弁護戦術もあるかとも思えるが、基本的には、抑圧による《安易な認識》であり、《独善性》で《おごり》が認められる。裁判官は、これらの電通の主張を受け入れなかった。それは、電通での労働時間「自己申告制」のもたらすサービス残業による長時間労働実態への洞察があったからである。1996年東京地裁は、自殺は異常な長時間労働によるものであるとし、電通に1億2600万円の損害賠償の支払いを命じた。電通は控訴していくが、最高裁でも、東京地裁を支持する結果となった。

過労死自殺の2例目は、新入社員の女性が過労自殺した違法残業事件として今回の報告書にも触れられているものである。1例目に比べるとよく知られており、紙数の関係から、ごく簡単に記すことにする。熊沢（2018）によれば、2015年4月に電通に入社した東大卒の女性社員は、残業月105時間の激務〈システムからの強制〉が続いていた。その上ハラスメントも重なり〈システムからの強制〉、心身の疲労から心を病み〈バランス感覚を失う〉、2015年12月に、自殺した。母親の切実で強い抗議もあって、マスコミでも広く報道された。この電通事件は、労災認定され、電通は労働時間管理と安全配慮義務違反ゆえに刑事罰も受けている。

電通は、1991年に続く2度目の新入社員の過労自殺として、社会的にもかなり厳しく批

判された。しかし、今回の報告書では、それは、一部の局所的な問題として、局所的な再発防止策に止まり、全社的なコンプライアンス違反の反省とはならず、その結果、今回の談合事件の要因とすらなると記されている〈内在的な悪の抑圧〉〈内在的な暴力性の抑圧〉〈葛藤の少なさ〉《安易な認識》《おごり》。局ごとの現場主義による閉鎖的な人事制度により、現場において偏った価値観や行動様式が定着する一方で、新たな視点や価値観を取り入れることが難しくなっていた《安易な認識》《おごり》【閉じていく態勢】。

「電通：鬼十則」という「組織の物語」は、1991年入社2年目社員のパワハラ・過労自殺の後で、新人研修の研修項目からは削除されたという。また、2015年新入社員の過労自殺の後、2017年度からは、社員手帳の記載が削除されている。しかし、氷山の一角にすぎない「電通：鬼十則」を削除したからといって、問題の解決にはならなかったのは当然である〈内在的な悪の抑圧〉〈内在的な暴力性の抑圧〉《安易な認識》《おごり》。言うまでもなく、今回の報告書にあるように、その背景には、成果を優先する組織風土や法令遵守の意識を欠いた経営陣の姿勢、業界随一というおごりなどの経営・労務管理システムの長期に山積されてきた企業体質・制度問題があったと思われる。以上のように、ここでは、概念、カテゴリー、コアカテゴリーの大部分の存在が推測される。このような条件下で、物語が危険になったのである。

「昔のことにしても、さすがに靴にビールを注いで飲ませるのはひどすぎるよね」、しかし「あの電通だからね」とか、まるで「電通じゃしょうがない」と「諦める」かのように、ここでも、電通を私たちと「分断」して、「特別扱い」するかのような「物語」があるのかもしれない。このような私たちも十分に自覚していない「泣く子と地頭には勝てぬ」的な物語による、電通を「特別視」して「諦めて」しまうような「分断」が危険なのである。電通の特殊な社風と言われるが、「電通：鬼十則」にしても、見方によっては、営業マン心得の極端な形と見えるようにも思われる。電通を特殊なものと「分断」し「諦めて」しまうのではなく、私たちの会社や団体等の組織と通底し、地続きであると見ていくからこそ、今後の再発予防の手がかりとなるのである。

調査報告書によれば、これらの課題を、社内の一部署だけで生じた出来事として部分対応し、全社的に遵法意識を広く求める取り組みを、回避したのだろう。つまり、問題を過小評価して見て見ないように抑圧し、正確に評価・検討する直面化から逃避し、課題解決を先送りしたということだろうか。そのように見るならば、電通の組織風土の物語の危険性は、特殊なものではなく、ある程度までは、私たちの組織風土の課題でもあるといえそうに思う。言うまでもないが、だからと言って、これまでの電通の問題を寛大に見るなどというつもりはない。それは、自分たちの組織が今取り組んでいる問題と、程度と質は異なれ、同じ位相にある類似の課題なのである。切り離し、「諦めて」しまわずに、電通の今後の取り組みに強い関心を持ち続けることが、電通にとっても、私たちの組織にとっても、重要な「取り組み」であると思われる。

4 組織において物語が危険になる時の恐ろしさ

概念〈システムの強制〉でも触れたが、教祖にマインドコントロールされ、命令されてサ

リンを撒いた実行犯たちは、視野を広げると、河合が指摘するように、我が国のBC級戦犯の問題にまで繋がるところがある。周知のようにBC級戦犯とは、第2次世界大戦後、連合国の軍事裁判で裁かれた戦争犯罪者のことである。河合が述べているのは、上官の命令で捕虜虐待や捕虜虐殺の罪に問われた下士官や兵士のことと思われる。軍事裁判では、上官の命令に基づく行為でもその責任を免除されないとされたために、当時、上官の命令に逆らうことなど許されない軍隊の強制下の行為でも、有罪として処刑された人々があった。日本の大東亜共栄圏構想の完遂を謳った全体主義がもたらした「大きな物語」の危険性であった。

さて田尾（1991）は、組織の、人から成り、人のためにある、ヒューマン・オーガニゼーションの側面と、仕事のためにあるワーク・オーガニゼーションの側面との相剋を指摘した上で、組織を支える全体主義について警告している。

「全体を調和させ、それを維持するためには、部分、そして、個々は、犠牲を強いられる。目標を達成するためには、命令に対するスムーズな応諾がなければ、組織は統合されたシステムを成り立たせることはできない。とすれば、いわゆる全体主義は、組織を支えるイデオロギーでもある。全体主義は、政治社会のことだけではない。教科書のなかただけでお目にかかる言葉でもない。日頃の組織のなかの、何げない生活のなかに深く巣くって、機会があれば、いつでも頭をもたげてくるような身近なものである。」

また田尾（1991）は、組織と個人の否定的側面について、「組織が硬直に向かい、いわゆる病理現象を来すこと、それが人間にとって好ましくないことは、これまでに幾度となくいわれてきたことである。しかし、それでもまだ、いい足りないことが残されているのではないかと感じるほど、組織と人間の危うい関係は、多くの人々の皮膚感覚の一部になっている。」と言及している。

さて最後に、今回の分析目的の範囲外のことになるが、物語の危険性への対応の手がかりになりそうなことに少しだけふれておきたい。

オウム真理教をめぐる対談の終わりのほうで、河合は次のように話している。「ただね、これからはもうちょっと人間も賢くなって、どんな組織にせよ家庭にせよ、ある程度の悪をどのように抱えていくかということについて、もうちょっと真剣に考えたほうがいいと思いますね。それをどのように表現し、どのように許容していくかということです。」

筆者には、対談の中での、河合の「煩惱を抱きしめていく力」という言葉が、鍵であるように思える。煩惱の存在を受容し、煩惱を抱えつつ、そこから生じる葛藤といかにつき合っていくのかという姿勢に、筆者も、その難しさに迷いながらも、共鳴している。もしさらに筆者が付け加えるとすれば、煩惱を認めるがゆえに、個人や組織がある一線を超えてしまう悲惨さを、できる範囲で、予防するようなシステムを考えるという点だろうか。できるならば、それは、局所的で短期的な対応策ではないことが望まれる。難しいが、問題の背後にある価値観や組織風土の改革までを視野に入れた制度設計であれば素晴らしいと思う。しかし、そのようなガイドラインや法律は多角的に、継続的に、検討されねばならず、言うは易く、行うは非常に難しである。そのような時には、そこで、多層的・多様な視点を持つ多分野の異質な人々を「つなぐ」という物語の「効力」が働くことを、期待したいものである。

私見ではあるが、十年前と比べても、対話・つながり・共同体が失われつつあり、一方、

フェイクニュース・バッシング・ヘイトスピーチなどによる「分断化」が増大する危うい社会に移行しつつあると思う。その先に、闘争・破局などの悲惨な未来を心配するのは、筆者だけであろうか。環境問題をもみても、このままでは、ディストピアは避けられないとも言われている。とりあえずは、身近な人々の間で、語りだし、会話をすることから始められないだろうか。何もしないよりは、発信し、対話をすることで、少なくとも、無関心・傍観という現状の黙認・追認そして否認を、抜け出す糸口になりそうに思うのであるが。

終わりに、本研究の今後の課題について述べたい。本研究は、限られたデータに基づく研究の結果であり、今後、新たなデータによって、さらに概念を精練していかなければならない。また、物語の危険性への対応も研究の必要があると考えている。

【引用文献】

- Gergen, K.J. (1992) 「ナラティブ・モデルを越えて」 McNamee, S.& Gergen, K.J. 編 (野口裕二他訳, 1997) 『ナラティブ・セラピー —社会構成主義の実践』 金剛出版 第6章
- 辺見庸 (2006) 『「鬼畜」対「良民」だったのか —サリン現場十年目の回顧』 「自分自身への審問」 毎日新聞社, 123-129.
- Jonathan Gottschall (2021) THE STORY RARDOX Basic Books ジョナサン・ゴットシャル (2022) 「ストーリーが世界を滅ぼす」 東洋経済新報社
- 河合隼雄, 村上春樹 (1994) 「現代の物語とは何か」 河合隼雄 (1995) 『こころの声を聴く 河合隼雄対話集』 新潮社
- 河合隼雄, 村上春樹 (1995) 『「物語」で人間はなにを癒すのか』 河合隼雄, 村上春樹 (1996) 『村上春樹, 河合隼雄に会いに行く』 新潮社
- 河合隼雄, 村上春樹 (1995) 「無意識を掘る “からだ” と “こころ”」 河合隼雄, 村上春樹 (1996) 『村上春樹, 河合隼雄に会いに行く』 新潮社
- 河合隼雄, 村上春樹 (1997) 『「アンダーグラウンド」をめぐって』 「河合隼雄氏との対話」 村上春樹 (2003) 『村上春樹全作品 1990~2000 ⑦ 約束された場所で 村上春樹, 河合隼雄に会いに行く』 講談社
- 河合隼雄, 村上春樹 (1998) 『「悪」を抱えて生きる』 「河合隼雄氏との対話」 村上春樹 (2003) 『村上春樹全作品 1990~2000 ⑦ 約束された場所で 村上春樹, 河合隼雄に会いに行く』 講談社
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究法への誘い』 弘文堂
- 熊沢誠 (2018) 『過労死・過労自殺の現代史』 岩波書店
- 新田泰生 (1994) 「組織への依存をめぐって」 『人間性心理学研究』, 12, 1, 14-19.
- 新田泰生 (2018) 「私の産業精神保健考 —ブラック企業・過労死と働き方」 『産業精神保健』 26
- 丸山圭三郎 (1995) 「物語」 木田元他編 『コンサイス 20世紀思想事典』 三省堂
- 田尾雅夫 (1991) 『組織の心理学』 有斐閣
- 読売新聞 (2023) 『「五輪は電通」おごり』 2023, 6, 10. 朝刊 p 35.